

北へ ◆ 山崎有理

夜どれもくらげの漢字の海だからくらげの漢字の月だから

蝉の声 すこし笑顔のぎこちない戦車と記念写真を撮ろう

ケーキからいちごをやるやさしさにおれは帰るよ夕日の北へ

貧しさがからだになるからフィクションの代官山へ花は降りつつ

寒がりなここはだれかが好きな海朽ちた金属バットをたたむ

花火が話を聞いてくれないだから思い出話とかどうでもいい

信号が七色となりきみを待つ根もとの林檎を採りながらの意
のはらよりどれも一度は来た道か牛起き上がれもうすぐ家だ

方角もない風の吹く棧橋にアンダースローで星を重ねる

どの羽根か掻きわけ街に日がさして海からはおれ土からはきみ

話し足りないからさようならをする道をとくきみ冬の夜から

鳥ずつと鳴き声だけであの鳥とわかられている日曜日の朝

海岸をたどる ◇ 阿部圭吾

青だから海に行こうと言う人の胸の向こうに海を見ている

永遠を信じる儀式なんだろう 国道沿いを君と歩いて

海岸に一歩ずつ近づいていくたび背中から生えそうな羽

二人用アイスクャンデーわりまくる パキン、ポキンと夏が鳴りだす

マッキーであなたの胸に線を引き水平線と呼べばゆらめく

光化学スモッグ注意報ずっと響き渡って君と駆けだす

夕焼けの端から崩れていく夏の 少女のような最後の光

月にまで歩けるようになることを話して海岸線をたどった

パラソルは開かれたまま錆びてゆきいつか空へと飛び立っていく

海だったはずのシャワーを浴びている さっきまでふたりがいた海の

だんだんと薄れてしまうマツキーのそれでも君に刻まれてゆく

潮騒にさらされながら眠るとき生まれる前のようにやさしい

その長いまつげ微かにふるわせて君は白鳥のように目覚める

朝焼けを羽ばたくつがい信じあうために生まれてきたかのように

何度でも君に水平線を描く君という海を何度もつくる

冬の縁語 ◇ 大村咲希

秋過ぎてまた猫なんか引き寄せているね そのニット今年も着るの？

ただ歩きただ話す 二人して可愛い服で着ぶくれたまま

お互いの恋人とのこと話すときだけ手を握る指は絡めず

そうだなあ、あなたがまずいと思ってる午後ティーのミルクティーをよく飲む

あなたしか触っていないところにもかすめたさすが恋人の指

わかられていた い とつくに呼び捨てにされているけど正解にした

いざ会うとあなたの恋人の前で水のおかわりばかりしたこと

また二人以外の人を傷つけて思いだす教室のベランダ

ユニコーン柄のあなたが持ち歩くブランケットで膝を覆って

一粒ずつポン・デ・リングを交換しもちもちまるい幸せである

なんでキスしなかったのかわからない（わかる）聞きたくないこともある

歯磨き粉借りにあなたが部屋に来た修学旅行の密やかさあれ

バーミヤン探そうと思わないほうがいいよ都心で首をすくめる

たどり着き「一昨年もここ来たよね？」と問えば「一昨年だっけ？」ふわりと

このへんの地図はそろそろ描きあがる 冬はやっぱりあなたの縁語

Light colors ◇ 谷村行海

生殖を終えた女が透き通った夜空の笑顔で出ていくホテル

キャバクラのキャの照明が切れている今日もどこかで人が死ぬんだ

たぶん仏の娼婦だろう深夜の中野は誰もが一人

牛丼屋のBGMが泣かせにくるまた細胞が更新される

人間のためではなくてタクシーのライトは鳥の行路を示す

例えば青春のおわり 例えば母胎からの産出 太陽が昇った

コンセントに挿せば家電は動き出す（ぼくたちは）なんにでもなれるはずだった

スノーピーのフィギュアの真顔の生き生きとそういうえば歯を磨いてないや

叫ぶとき震えるところがあるでしょうそこに埋め込むような秋空

元カノもこのチューハイが好きだった鴉の瞳は人よりも澄む

マニュアルで操作をされてマニュアルの笑顔を顔に浮かべてバイト

コンビニの照明はもう目に慣れた大人になるってそういうことだ

でらでらとネオンは街に降り注ぎ昨日も夜はあったのですね

街灯に餃子の皮はへばりつきこの街はまだ生きてると知る

日曜の夜の新橋 空き缶のあふれた汁から明日が広がる

食事のあかり ◇ 辻原僚

おさなごがむっと絵本を読みかえすそんな若さはつづくだろうか

いつまでもあごに卵をつけながら身体は音を立てて歩いた

遠ざかる陽射しのなかでお望みのとおりあなたは竜だったこと

草のさき花のさきからくらくらとわたしへこぼれだす私小説

ぺてんし、と呼ばれ食事のあかりから皿のこすれる音がきこえる

宝くじの代わりにひとつ肉まんを買うこともせず川は足跡

夜更かしなあなたの胸で思い出はずっと身なりを整えている

ふわふわと生まれる猫のほとんどもを気にかけていて眠るのがへた

あどけないことばの底に星々のひかりのようなひとの住むこと

おとなしく続くせかいはまたひとつ新種の鳥を考えている

てのひらにカレーの風が吹いていてみんなが顔をあらう朝だよ

バス停の観光客の静けさは見える気がして列にならんだ

さつきまで夢にみていたプードルが汚れた足をぬぐわれている

テイラミスを見ているときはわたしたちテイラミスのことしか話せない

コーヒーの香りが鼻になじむまでほがらかなひとに目を休ませて

一級隔離封鎖都市 ◇ 堂那灼風

朝焼けはやがて塗り替えられるのに灰にまみれた郵便ポスト

過ちに手を突っ込めば手が切れるなにかをつかむのと引き換えに

空っぽが形を持って林立しもはや街とは呼ばれない場所

来るたびにヒトのものではなくって道は大地に戻りつつある

市民への被害軽微と記されたデータと焦げた誰かの帽子

すり鉢の周囲に傾ぐオフィス街すべて祈念の石碑となって

黒っぽいクモの張る巣が揺れながら陰った場所にきらめいている

ひとしきり積もった灰をさらう風また灰は降る呼吸のように

思い出の中でうるさいクラクション今はまばらな遠吠えばかり

入り組んだ路地をふちどり執拗なまで整然と這うアラベスク

したたかに生き延びているつる草のエラーがやがてレギュラーになる

囲われた汚染区域に根を張って奇形となって咲き継ぐすみれ

空間に満ちているのはなんだろう生存不能な数値の中で

順当に影が深まりコウモリの正しくエコーする赤い宵

語り部がいなくなるうと夜は来て星は星座の形で光る

木星衛星軌道都市マルドゥーク ◇ 堂那灼風

衛星や小惑星を建てて住み太陽系に足場を伸ばす

星ごとに暦はずれて人間の争いの種になることもある

朝晩と粉を溶かして茶を沸かす衛星労働向けのチープな

金持ちの代替労働力どもと肩を並べる階級に生き

同僚の疲れた顔に手を振って 疲れちまった空気を吸って

定まった休暇と娯楽この星のあらゆるものが部品に見える

合理的仕組みだという本国のエリートによる世界のすべて

月軌道土星軌道にも親戚はいるけど互いに気兼ねしている

マルドゥーク木星歴の正月に地球でとれた緑茶が届く

鎮庄は治りきらない傷だから上の世代に牙はもうない

碑銘なき共同墓地よ没年は等しく独立闘争の年

血でできた碑ではないのか艶やかな黒いキューブは行儀良く立つ

三世代かけて築いた衛星に酸素のような管理は満ちて

人類のためなんだろう俺たちは木星圏の人類なんだ

冗談じゃねえ っつて 吼え立ててやれもう一度どうして地球ばかりが青い